

Title	能《是害》と後醍醐天皇の怨霊
Author(s)	澤野, 加奈
Citation	演劇学論叢. 2020, 19, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97393
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

能《是害》と後醍醐天皇の怨霊

澤野 加奈

はじめに

能《是害》は、『是害房絵』を典拠としていることが従来から指摘されている。¹⁾能《是害》では、曼殊院蔵『是害房絵』上巻と下巻にみえる詞句を用いている。曼殊院蔵『是害房絵』の奥書のなかには、「延慶元年（一三〇八）初冬下旬之候、於磯長寺塔本草庵写之」とあり、磯長寺において鎌倉時代に書写されたとしている。この『是害房絵』についての記録が、伏見宮貞成親王の『看聞日記』嘉吉三年（一四四三）年四月二十三日条にみえる。そこでは、「室町殿絵一合入見参。天狗鬼類絵。是容房絵。蝦蟇絵上下。狂言絵等五卷」などとあり、室町殿でも『是害房絵』を見ているようである。また、万里小路時房の『建内記』嘉吉元年（一四四二）四月二十八日条のなかには、「中山宰相中将送使云、何にても絵可進覧、雖狂絵可進之由被仰所々之由也、仍是害房絵、不顧比興左道之物付使送之、如料紙

余々不可説也、進上事可相計哉之由示了」とある。ここでは、狂絵でもよいと言われたので、『是害房絵』を後花園天皇に送ったとしている。²⁾

能《是害》の作者は、『能本作者註文』などの記載から、竹田定盛（一四二一〜一五〇八年）とされる。大鳥壽子氏は『医師と文芸―室町の医師竹田定盛』のなかで、定盛の医師として活動や能との関わりについて詳しく記されている。³⁾ここでは、大鳥氏のまとめられたものに沿って、定盛の記録を辿っておく。定盛は、寛正四年（一四六三）に、洛中の医師として名前が挙がる。足利義政は、「医師竹田宮内卿能芸弁説。當時是出群」とし、定盛の諸芸の知識を誉めている。また、定盛は文明二年（一四七〇）に、応仁の乱の影響を受けて室町第八へ移っていた、後花園上皇（一四一九〜一四七〇）の臨終を診ている。その後、文明七年（一四七五）から内裏へ召されるようになり、後土御門天皇の皇子を治療している。文明十二年以降になると、後土御門天皇（一四四二〜一五〇〇）の主治医として、頻繁に参内

するようになる。定盛は幕府の御用医師でもあり、義政や義尚を診る機会もあったが、延徳二年（一四九〇）に針治療の効果がなかったとして、足利義視から解任される。そうした中でも、後土御門天皇はその翌月に定盛を参内させていた。

また、文明十三年には、定盛のとりもちで内裏手猿楽が行われている。その他にも、診察に参上した際に、定盛自身が度々謡を披露している。謡や猿楽を通して結びついた良好な関係は、後土御門天皇が崩御する明応九年（一五〇〇）まで続いている。こうした後土御門天皇と定盛の関係性のなかで、能《是害》は構想されたことになるだろう。

さて、後花園天皇から後土御門天皇の時代にかけては、南北朝合一後に消滅せずに残った旧南朝勢力が活動していた。また、『是害房絵』のなかには、南朝を連想させる要素を見出すことができる。本稿では、『是害房絵』から能《是害》へと作りかえられるにあたり、旧南朝の脅威が内容に影響を与えたと考える。

さらに、後土御門天皇は、『太平記』に関心をもつていたようである。そうした『太平記』の記述を中心に、能《是害》における天狗について検討する。

一、三種の神器の奪取

ここでは、後花園天皇から後土御門天皇にかけての時代背景についてみておく。明德三年（一三九二）に、足利義満が立て役者となり、南北朝が合体する。この時、南朝の後龜山天皇から北朝の後小松天皇へ三種の神器が譲渡される。その後、伏見宮貞成親王の王子である彦仁王が、北朝の後小松上皇の猶子となり、正長元年（一四二八）に後花園天皇として踐祚している。

この後花園天皇の時代には、南朝皇胤を擁する勢力によって、土御門内裏から三種の神器が奪われている。南北朝が合体した後においても、旧南朝の勢力は消滅せず再興をはかる動きがあった。南北朝合一後の旧南朝の活動については、森茂暁氏が詳細にまとめられている⁶⁾。以下、森氏の研究によって禁闕の変、長祿の変の概要と、南朝皇胤の足跡についてみておく。嘉吉三年（一四四三）九月二十四日条の『大乘院日記目録』では、「内裏炎。悪党の所為なり。神璽等紛失」と記している。これは禁闕の変とよばれる。悪党によって内裏に火がかけられ、神璽等が失われた。後花園天皇は、左大臣の邸に難を逃れ、宝鏡とともに無事であった。宝剣は翌日にみつかったが、神璽は紛失

したまま所在不明となる。このとき後花園天皇が綸旨を下し、南朝皇胤の金蔵主、通蔵主兄弟や日野有光などが討ち取られている。

その後、長祿の変があり、長祿元年（一四五七）に赤松氏の旧臣が、吉野の奥にいた南朝皇胤の一宮、二宮を殺害する。その際に、神璽の預けられている場所を知ることとなり、長祿二年に「南帝母儀在所」から神璽を奪い返している。

また、応仁の乱の際には、後土御門天皇と後花園上皇は、足利義政の東軍側となっている。それに対して、足利義視の西軍では、山名持豊が小倉宮の末裔を南帝として擁立しようとした。さらに、文明二年（一四七〇）には、「後醍醐院の御末」とされる日尊という人物が、密書をもたらし計略をめぐらしたという罪で殺害されている。後花園上皇は、文明二年に死去しているが、これは日尊の怨霊のせいだとささやかれたという。こうした南朝皇胤の動きを、史料のうえで文明十一年頃まで辿ることができるようである。

このように、南北朝が合体した後においても、南朝皇胤が反体制勢力に担がれ、皇位奪回を目指していた。また、寛正五年（一四六四）に踐祚した後土御門天皇の時代になっても、皇位継承を望む旧南朝の活動は続いていたことにならる。後醍醐天皇の子孫を擁する動きは、後花園天皇や後土

御門天皇を脅かすものとなっていたと言えよう。

二、『太平記』にみる三種の神器

前章でみてきたように、後花園天皇の時代には、南朝皇胤を擁する勢力によって、神璽が吉野の奥へと運ばれていた。三種の神器が吉野へと運ばれるという事態は、それ以前にもあった。そのことを『太平記』がどのように記しているか、ここでみてゆくことにする。

建武三年（一三三六）八月に、足利尊氏が擁立する光明天皇の踐祚が行われた。同年十二月、後醍醐は幽閉状態にあった花山院をあとにし、三種神器を携えて吉野へと向かっている。『太平記』「雲景未來記の事」では、三種の神器が吉野に運ばれたことの意味を、次のように記している。

後醍醐院武家を亡ぼされしによつて、いよいよ王道衰へて、公家悉く廢れたり。この時を得て、三種の神器、徒らに微運の君に随つて、空しく辺鄙外土に交はり給ふ。これや（神明）わが朝を棄て給ひ、王威残る処なく尽きし証なり。これ元暦の安徳天皇の御時に相同じ。国を受け給ふ主に随ひ給はぬは、国を守らざる驗なり。

三種の神器が、京の都にいる光明天皇に随わず、後醍醐天皇に随つて片田舎へと紛れてしまった。そのことは、神明がわが朝を棄て、国王の權威が尽きる証であるとしている。このように三種の神器の行方は、神の守護に関わるものとなる。また、さきにみた後花園天皇の時代においても、内裏から神璽が不在となる時期があった。禁闕の変によつて三種の神器が奪取されるという事態を、『太平記』の内容にあてはめてみるならば、それは神の守護を揺るがす出来事であつたと言えるだろう。

この『太平記』については、後土御門天皇が周囲にいた三条西実隆や内大臣中院通秀などに書写させている。たとえば、文明十七年（一四八五）、『実隆公記』では、「太平記十二、書写之事、今日被仰之」としている。また、『十輪院内府記』には「太平記進上之、叶叡慮云々、祝著多端々々」とある。さらに、『吉田家日次記』には、「以山科宰相言国卿被下太平記劔卷、此内神書事等有之、文字已下有相違事為可直進者被副下御硯了、余披見此卷之处不審繁多也。三種神器一向引入弘法之、不可説事也。文字等誤已下少々直之進上了。三種神器事以外相違之由申入了」などがある。吉田家と後土御門天皇の近臣である山科言国のおいでで、三種の神器の記述についてのやりとりがあつたことを載せている。後土御門天皇は、こうした『太平記』の

内容についても、関心を寄せていたことになるだろう。

三、絵巻にみる南朝 — 金剛山 —

さて、能《是害》の典拠となる『是害房絵』の中には、南朝を想起させる要素を見出すことができる。ここでは、『是害房絵』下巻において示された霊地と、南朝の關係についてみてゆくことにする。

まず、『是害房絵』の内容について概観しておく。『是害房絵』の上巻では、大唐の是害房という大天狗の首頂が、愛宕山にいた大天狗の日羅坊を訪れる。日本は小国だが佛法東漸の国であり、有智有行の僧の出離を妨げるために来たという。是害房は、比叡山から下ってくる僧正たちの前にあらわれる。僧正たちが不動明王の真言などを唱えると、弘法守護の童子たちが是害房を痛めつけて撃退する。また、『是害房絵』下巻では、日本が小国であるが侮れない理由について説いている。まず、日本は神国であり、仏や菩薩が光を和らげて現れる。神宮皇后が高麗、百済を攻め、上宮太子が新羅、任那を従えたことも、本朝の弘法を守るためであるとしている。また、そのことと併せて、『霊地他州に過れ、効驗我朝に、新たなる故也」とし、磯長寺、四天王寺、金剛山、高野山、叡山を列挙して、それ

それぞれの霊地について説明する。是害房は、加茂河のあたりで湯治をすると、名残惜しみながら本国へ帰ってゆくという内容である。

このように『是害房絵』下巻では、優れた霊地があることを挙げている。その中でも、金剛山について説明する分量が最も多い。『是害房絵』下巻に記された、金剛山の説明の中には、次のような箇所がある。

凡当山ニ有五名、久遠劫已来、三災不壊、故名金剛山、法起并、従往昔常ニ住此山而、演説妙法、故号転法輪山我国、昔為海中之時、天照大神、自天宮率八万神達而、降当山、始テ成国土、故名神福山。一万四千七百ノ余神祇、来住而、守護日本国、為大福田、故称大福山、又、超過余山而、為靈峯故、云一乘山、是則表一条弘宣之儀也。

金剛山には、天照大神が八万神を率いて降り、国土となったとしている。また、一万四千七百余の神祇が来て、日本国を守護していると記している。

この『是害房絵』下巻における金剛山の記述は、『金剛山縁起』からの顕著な影響があると指摘されている¹⁾。『金剛山縁起』は、正応二年（一二八九）以前に成立したと推

定されており、葛城郡金剛山にある転法輪寺、ならびに葛木神社の縁起であるという²⁾。そうした『金剛山縁起』では、天平寶字三年に興福寺の仁宗上人が時見堂で参籠した際、童子が現れて述べた内容を次のように記している。

當山有五名、久遠劫已来、三災不壊、故名金剛山、法起菩薩、従往昔止住与千二百人之眷属常在其中而、演説妙法、故号転法輪山我国、昔為海中之時、天照大神、自天宮率八万神達而、天降当山、始成国土、故名神福山。一万四千七百余神祇、来住而、守護日本国、為大福田、故称大福山、又、超過余山而、靈峯故、云一乘山、是則表一乘弘演之儀也。

右にみる『金剛山縁起』と『是害房絵』下巻の記述は、同じ内容となっている。また、この他にも『是害房絵』では、華嚴経のなかで東北方に清涼山があり、海中に金剛山があるとし、「唐国の清涼山、吾朝の金剛山」とする記事を示している。この華嚴経に関する内容は、『金剛山縁起』の「大唐国清涼山日本国金剛山入佛記事」のなかに記されている。

川崎剛志氏によると、『金剛山縁起』は北畠親房の『元元集』などに撰取され、南朝の後村上天皇にも献上されて

いるという。さらに、『金剛山縁起』が「律宗寺院を中心に大和国とその周辺に流布し、伊勢外宮でも重く用いられた。そしてそれが、金剛山に対する南朝の深い信仰の源の一つでもあった」とされている¹³⁾。

このように金剛山は、南朝との関わりが深い場所であった。また、『金剛山縁起』のなかで、金剛山は日本を守護する神が降り立つ大福山としている。そうした、南朝の信仰の拠り所となる金剛山を、『是害房絵』下巻では霊地にあげ、『金剛山縁起』と同じ文章を用いていたことになる。これまでみてきたように、『是害房絵』のなかで霊地のひとつとしてあげられている金剛山には、天照大御神をはじめとする神々が集結している。また、神々が金剛山に集結することは、あたかも南朝を守護しているようにもみえるものであった。

四、絵巻にみる南朝

— 聖徳太子と後醍醐天皇 —

さきに、『是害房絵』下巻が示した金剛山についてみてきたが、ここでは金剛山以外の磯長寺、四天王寺、高野山、叡山といった霊地と、後醍醐天皇との関わりについてみてゆく。

『是害房絵』下巻では、磯長寺を霊地の筆頭にあげている。磯長寺を紹介する『是害房絵』の本文には、「是過去七仏法輪処、大乘相応功德地、一度参詣離悪趣、決定往生極楽界ト云ヘリ」と記されている。これは、聖徳太子の偈文として廟幅の石に記された「廟幅偈」にある文句と同じである¹⁴⁾。また、この『是害房絵』の本文には、「上宮太子、勝地ヲ本朝ニ撰テ、身骨ヲ此砌ニト、メ濟度ヲ末世ニ施シテ、利益ヲ群類ニ及シタマウ、堀内偈起注文勝地ノ□□極レル、感シテ猶有余者歎」とあり、聖徳太子がこの砌に身骨をとどめたとしている。この中にみえる「起注文」もまた、太子廟から掘り出された箱に記されていたものである。さらに、『是害房絵』の本文では、「是以、弘仁元年□月十五ノ夜、弘法大師、此砌ニ詣シ給シニ、御廟幅ノ内ニ光明輪アリ、光ノ中ニ、弥陀ノ三尊現シテ、法花、勝勢等ノ、大乘ノ要文ヲ誦シ給ヘリ、見佛聞法ノ力ニヨリテ、大師第三発光地ヲ証給ヘリ」としている。弘法大師がこの廟を訪れたとする内容は、「弘法大師御記文云」にみえるものと同様である¹⁵⁾。こうした「廟幅偈」、「弘法大師御記」、「起注文」は一具となって中世に流布していたという。『是害房絵』下巻においても、「起注文」、「廟幅偈」、「弘法大師御記」を掲げて、磯長寺を聖徳太子の廟とし、霊地のひとつとしていたことになる。

このように『是害房絵』下巻では、弘法大師が聖徳太子の廟幄を訪れたことが記されている。そうした「弘法大師御記」にみえる内容についての解釈が、『聖徳太子伝私記』のなかに示されている。そこには、「大師（弘法大師）は太子の御身なり。天竺には勝鬘、唐土には南岳、日本には上宮、皆是弘法大師なり。太子廟幄に詣て、発光定を証したまふ。皆是れ由有り。故に御自筆、自然に太子の御前に留ると云々」という記事がある。このなかでは、弘法大師が聖徳太子の廟を訪れたのは、弘法大師の前身が聖徳太子であるためとしている。また、こうした弘法大師を聖徳太子の再誕とする説が、平安末期から鎌倉時代にかけて広まっていた¹⁹⁾。

さて、文観弘真は『天長印伝』の伝授記において、後醍醐天皇を弘法大師の後身としている¹⁸⁾。また、弘法大師が聖徳太子の後身であることから、文観は後醍醐天皇を聖徳太子の後身として位置づけていたようである¹⁹⁾。このように、後醍醐天皇が聖徳太子の後身ということになれば、聖徳太子の廟である磯長寺は、後醍醐天皇にも関わりのある場所ということになるだろう。

次に『是害房絵』下巻では、磯長寺の説明に続いて、四天王寺を霊地に挙げている。ここでは、「四天王寺者、釈迦如来転法輪ノ所、当極楽土東門中心也、七宝ヲ地ニ敷

テ、青龍恒ニ守護シ、麗水東ニ流レテ、コレヲ飲ハ、法薬トナル」としている。この文言は、『四天王寺御手印縁起』の中にみえる語句をつないだものとなっている。『四天王寺御手印縁起』は、聖徳太子自筆と伝えられ、寛弘四年（一〇〇七）に発見されたものである。

また『四天王寺御手印縁起』については、後醍醐天皇が建武二年（一二三五）に写本をつくり手印を押している。この『四天王寺御手印縁起』の識語には「当寺仏法最初霊地、王道擁護道場」とあり、後醍醐天皇は「建武政権における朝家再興への強烈な意思を太子に託し」たとされている²⁰⁾。

さらに、『太平記』第六巻「太子未来記」では、楠正成が四天王寺で聖徳太子が書き残したとされる未来記をみて、後醍醐が再び帝位につくと解釈していた。赤松俊秀氏は、聖徳太子の未来記が南朝の君臣に強い影響を与え、原動力のひとつとなっていたと指摘している²¹⁾。このように、四天王寺は南朝の心の拠り所となっていたようである。

このほかにも『是害房絵』下巻では霊地として、高野山と比叡山が名を列ねている。これは、顕密双方からの効験を備えた形となるが、後醍醐天皇との関連で見ると次のような事柄があげられる。高野山に関していえば、後醍醐天皇は『高野山御手印縁起』の写本を作り手印を押している。さらに、晩年には「天子尊治敬白」と勅願文を高野山

に納めている。また、比叡山との関連でいえば、後醍醐天皇の皇子である護良（尊憲）、宗良（尊澄）が天台座主になっている。このように高野山と比叡山についても、後醍醐天皇と関わりのある霊地ということになるだろう。

後醍醐天皇は、『四天王寺御手印縁起』や『高野山御手印縁起』の写本をつくり手印を押ししていた。そうしたことから、聖徳太子、弘法大師へとつながる再生の図式のなかに、後醍醐天皇はみずから置いていたとされている。また、これまでみてきたように『是害房絵』下巻が霊地とした磯長寺、四天王寺は、聖徳太子ゆかりの地であった。そのことを押し広げるならば、聖徳太子ゆかりの霊地は、後醍醐天皇と関わりのある地としての意味をもつことになるだろう。

『是害房絵』曼殊院本が書写された磯長寺の場所は、南河内郡にあった。その南には金剛山があり、そこから東に行くと吉野へと通じている。『是害房絵』下巻において霊地として示された磯長寺や金剛山などは、南朝が活動する地域のなかにあったことになる。こうしたことから、後花園天皇や後土御門天皇にとっても、『是害房絵』は南朝を想起させるものであったと考えられる。

五、後醍醐天皇と後土御門天皇

前章のなかでは、後醍醐天皇を、聖徳太子の後身とする見方について触れてきた。聖徳太子については、後醍醐天皇だけではなく、後土御門天皇も関心を寄せていたようである。

まず、後醍醐天皇と聖徳太子との関係について、もう少しみておく。坂口太郎氏が紹介されている資料によれば、建武元年九月二十四日、後醍醐天皇の臨席のもと東寺において塔供養が行われている。その場における大阿闍梨の表白では、「誠是 我君（後醍醐）聖徳之所致、抑亦 高祖（弘法大師）冥助之所感。」として、後醍醐天皇の討幕の成功を「聖徳」によるものとし、弘法大師の「冥助」であるとしていた。また、「昔上宮太子之討守屋也、偏依四天王衆之擁護。今北闕至尊之征武関也、寧非三地大聖之加被。」とし、後醍醐天皇の討幕を、聖徳太子の守屋討伐に比している。このように、後醍醐天皇と聖徳太子とを結びつける見方が、この当時からあったことを示していると言えよう。

次に、『太子信仰』では、後土御門天皇が聖徳太子に対して関心のあったことを指摘している。長享二年（二四八八）に、三条西実隆が後土御門天皇へと太子伝の講義をし

ている(『実隆公記』)。さらに、翌年の『御ゆとの、上の日記』には、「しやうとく大寺(太子)のゑんぎ返しまいらせらるゝ」とあり、太子伝を読まれたのであろうとしている。また、文明十年(一四七八)の横川景三『補菴京華後集』には、「則異日必有如豊聡帝子者、与吾宗山内外護相得、使国家致於推古昇平之日也」とある。宗山とは、伏見宮貞常親王の王子のことで、後土御門天皇の従兄弟にあたっており、「如豊聡帝子者」が後土御門天皇をさしたものとされている。このように、後土御門天皇に対しても、聖徳太子を引き合いに出して表現されることがあったようだ。

後醍醐天皇は、塔供養といった儀式の場でも、聖徳太子と結びつけられることがあった。また、後土御門天皇は、三条西実隆から太子伝の講義などを受けている。後土御門天皇が聖徳太子に関心を寄せていたことは、後醍醐天皇の存在を意識することにもつながるだろう。

六、能《是害》における天狗とは何か

ここでは、能《是害》におけるシテの天狗について検討したい。まず、能《是害》の内容をみておくと、大唐の天狗の首領が、シテの是害坊である。また、愛宕山の太郎房がワキとなっている。日本は粟散辺地の小国ではあるが、

仏法東漸といわれる。是害坊は仏法を妨げるため、神の御国である日本へと渡る。是害坊は遠い過去における見仏聞法の功德によつて、三悪道は通れたものの魔境に沈んだ我が身を嘆く。それでも、仏法の仇敵となる決心をして、比叡山から皇居へと向かう僧正の前にあらわれる。僧正は不動明王の誓願を唱えると、明王、矜迦羅、制多迦と十二天が降魔の力を合わせる。しかし、明王、諸天では是害坊を撃退できず、そこに神々が加勢する。「東風吹く風に、東を見れば、山王権現、南に男山、西は松の尾、北野や賀茂の山風神風、吹き払へば」とし、山王権現、岩清水、松尾、北野、賀茂の神の力によつて是害坊は力尽きる。仏力、神力による妙なる力を受けて、是害坊は雲路に消えてゆくというものである。

さきにもたように『是害房絵』では、唐から来た天狗を是害房とし、愛宕山の天狗を日羅としていた。それに対し、能《是害》では、シテを唐から来た是害坊とし、ワキを愛宕山の太郎房としている。このように能《是害》では、『是害房絵』に示された愛宕山の天狗を、日羅ではなく太郎房としたことになる。

愛宕山の天狗を太郎房とするものとしては、『太平記』第二十七巻「雲景未来記」の記述がある。次に、『太平記』「雲景未来記」のなかに記されている、山伏の雲景と愛宕

山の太郎房とのやりとりを載せておく。

今は何をか隠し奉るべき。世に人の持てあつかふ愛宕山の太郎房にておはします。上座なりつる上綱は、諸宗の人集まり、徳行名望世に聞こえたる玄昉、真濟、寛朝、慈恵、頼豪、仁海、尊雲等の高僧達よ。その上の座席に、玉辰を敷き並べたるこそ、代々の帝王、淡路の廢帝、後鳥羽院、後醍醐院、次第の昇進を遂げて悪魔王の棟梁となり給ふ、やんごとなき賢帝達よ

雲景は、老山伏に愛宕山へと案内される。そこには高僧たちが居並び、尊雲の名前もみえる。また、後醍醐院が代々の帝王として名を列ね、悪魔王の棟梁となつている。雲景は、この場から暇乞いをして宿坊に辿り着くが、心静かにこの光景を思い返してみると、「疑ひなく天狗道に行きにけり」としている。²⁷⁾

ここには、悪魔王の棟梁という言い方がみえるが、『太平記』第二十四卷「正成天狗と為り剣を乞ふ事」では、後醍醐天皇について「元来、摩醯修羅の所変にておはせしかば、今帰つて欲界の六天に御座あり」と表現している。²⁸⁾この記事によるならば、第六天にすむ後醍醐天皇は、第六天の魔王ということになる。

この第六天の魔王は、天魔とも呼ばれ仏道の妨げをなすものである。『十訓抄』では天魔を「今の天狗の所変にかはらざりけり」と記している。森正人氏は、「天狗が、仏法の創始者たる釈迦の成道をさまたげようとした天魔と結びつけられる」としている。²⁹⁾また、源頼朝が後白河法皇を評して、「天魔は、仏法のため妨げをなし、人倫において煩ひを致す者なり。(中略) 日本国第一の天狗は、さらに他の者にあらず候ふか」(『玉葉』一一八五年十一月二十六日)としている。このように、天魔と天狗は同一視されていくようである。³⁰⁾

さらに、後醍醐天皇の人物評についてみてゆくと、『太平記』「雲景未来記」では、後醍醐天皇が賢王の行いを学んできたものの、真実の仁徳はなかったとし、「神明仏陀を御帰依あるやうに見えしかども、矯飾(流布本、橋慢)のみあつて、実儀まします」としている。『平家物語』延慶本では、「橋慢」「無道心」の者は死ぬと必ず天狗になるとしている。神明仏陀を帰依しているように見えるが、誠意がともわなかったという『太平記』の記述によるならば、後醍醐天皇は天狗になったという解釈が成り立つだろう。

こうした後醍醐天皇の死後における妄執を、『太平記』巻二十一「先帝崩御の事」では、次のように記している。

妄執ともなるべきは、朝敵を亡ぼして、四海をして太平ならしめんと思ふ事のみ。朕が早逝の後は、第八宮を天子の位に即け奉つて、忠臣賢士世事を謀り、義貞、義助が忠功を賞して、子孫不義の行ひなくは、股肱の臣として天下を鎮撫せしむべし。これを思ふゆゑ、玉骨はたとひ南山の苔に埋まると雖も、魂魄は常に北闕の天を臨まんと思ふ。

後醍醐天皇の魂魄は、常に京都の内裏を向いているとしている。また、朝敵とする尊氏一門を滅ぼすという後醍醐天皇の妄執は、義良親王や南朝の君臣に託されていた。こうした後醍醐天皇の怨霊が、社会に与えた影響は大きかったようである。たとえば、足利義政は後醍醐天皇の弔いをして受入れ、義政は東求堂に後醍醐天皇の位牌を安置している。このように、後土御門天皇や室町幕府にとって、後醍醐天皇の怨霊は脅威となっていた。

森茂曉氏は「後醍醐の怨霊は後南朝にとつて強力な援軍であつたに相違ない」とされている。南北朝合一後に残つた旧南朝勢力は、後醍醐天皇の妄執を引き継いだ形になるだろう。こうした状況は、定盛が能《是害》を作る際に意識されたと考えられる。

能《是害》では、神々が東南北西の四方から京の都を守護すると、シテの天狗が退散する内容となつていた。また、これまでみてきたように、『太平記』の記述から後醍醐天皇は天狗とみなされたと考えられることができる。さらに、後醍醐天皇は死後においても内裏を臨んでいた。こうしたことから、能《是害》におけるシテの天狗に、後醍醐天皇の怨霊を重ねてみるができるだろう。つまり、定盛は神々に守護された帝都から、後醍醐天皇の怨霊を退散させる能を作つたことになる。

おわりに

ここでは、これまでみてきた内容についてまとめておく。

能の典拠となる『是害房絵』では、上巻において僧正たち不動明王の真言を唱え、仏法守護の童子が現れて是害房を撃退する。また、下巻では、佛法東漸の理として優れた霊地があることを示している。この霊地のひとつである金剛山には神々が降り立ち、日本を守護する。しかし、是害房は上巻のなかで、すでに童子たちに撃退されており、神々が直接はたらきかけるような場面はない。それに対し、能《是害》では、是害坊を撃退するにあたって、

明王、諸天よりも神々の力が有効なものとなっている。また、それらの神々は金剛山から来るのではなく、京の都を囲む東南北から集結している。能《是害》においては、帝都が神々によって守護され、天狗を退散させる形になっている。

『是害房絵』の下巻には、金剛山や磯長寺、四天王寺といった霊地が示され、それらは南朝の心の拠り所となる場所でもあった。『是害房絵』のなかで、南朝を想起させる材料が記されていたことは、能《是害》の作成動機と無関係ではないだろう。

本稿では、能《是害》において、神々の力で帝都から退散するシテの天狗に、後醍醐天皇の怨霊を重ねて考察した。後土御門天皇は、後醍醐天皇について強く意識していたと考えられる。『太平記』のなかに見える後醍醐天皇は、死後も内裏を臨み、さらに愛宕山の太郎房とともに天狗道にいたとしている。この『太平記』については、後土御門天皇が関心を寄せており、周囲の君臣に書写させていた。

ここで、是害の性質についてみておくと、『是害房絵』では滑稽な存在であったのに対し、能《是害》では魔境に沈んだ我が身を嘆き、「敗北しながらもそれほど威厳を失わない」と評されている。³³ 能《是害》における威厳をもった是害坊の表現についても、後醍醐天皇が重ねられている

ためであると考えておく。

また、後醍醐天皇の怨霊は、後醍醐天皇の子孫へとつながる存在となる。後花園天皇と後土御門天皇の時代には、後醍醐天皇の子孫を擁する勢力からの脅威を受けていた。禁闕の変では、後花園天皇の内裏から神器が奪われている。その後、長祿の変によって戻るまでの間、内裏から神器が不在となる時期があった。こうした事態はそれ以前にもあり、後醍醐天皇が三種の神器を吉野へと運んでいる。このように後醍醐天皇の意志は、皇位奪回をめざす南朝後胤の活動に引き継がれたことになるだろう。さらに、『太平記』の記述によれば、神器が内裏から不在となったことは、王威や神の守護を揺るがす出来事ということになる。そうしたことから、帝都が神々によって守護されていることを、能《是害》の中で示すことに意義があったと考えられる。

以上のように、能《是害》では神々の力によって、京の都は守護されていた。そうした背景には、南朝皇胤を擁する勢力からの脅威があったと考える。また、後醍醐天皇の怨霊は、南朝後胤の活動を支える存在となっていた。これらのことから、神々が帝都に集結し、後醍醐天皇の怨霊を退散させる能として、『是害』を捉えることができるだろう。

注

- (1) 播摩光寿氏「謡曲『善界』小考—今昔物語集との関渉—」(『古典遺産』二十一、一九七二年)。
- (2) 能《是害》の詞章は上掛りと下掛りで、前場の名ノリ、着キゼリフ、問答にいくつかの異同がある。また、後場のノリ地において、上掛りが「山風神風」としているところを、下掛り・車屋本では「神風松風」としている。上掛りの写本(堀池宗活節付本)では、「日本は粟散辺地の小国なれとも、仏法東漸と聞時は心にかかりておほえ候程に、此たひ日本に渡り仏法をもさまたけはやとおもひ立て候」とある。それに対し、下掛りの写本(遊音抄)では「日本秋つ州は、仏法さかんなるよし申候ほとに、急かの国にわたり、仏法を妨はやと存候」としている。『是害房絵』の詞には、「日本ハ小国辺卑なれとも、仏法東漸ノ国ナレハ」「粟散辺土ノ小国ナレハ」などとみえる。「粟散辺地」「仏法東漸」を詞章に取り入れている上掛りのほうが、古態をあらわしていると考え、上掛りの詞章を用いる。また、現行観世流では《善界》としているが、観世の古本では「せかい」「是害」としている。本稿では、制作当時の能に言及していることから、能《是害》と表記する。
- (3) 岡見正雄氏「天狗説話展覧—『天狗草紙』の周辺—」(『室町文学の世界—面白の花の都々』一九九六年、岩波書店)。
- (4) 大鳥壽子氏「医師と文芸—室町の医師竹田定盛—」(二〇一三年、和泉書院)。
- (5) 後土御門天皇は、母の出自の低さから「伏見宮家で長らく養育されていた」(松蘭斎氏「中世禁裏女房の研究」二〇一八、思文閣出版)。また、伏見宮貞成親王は、永享八年(二四三六)に禁裏から「太平記」を借りて書写させている。親王は自身で「太平記」を読み、女房に聴聞させたという(鑑賞日本の古典『太平記』一九八〇、小学館)。こうした後土御門天皇の幼少期の環境のなかに、「太平記」との接点をもつ機会があったのかもしれない。
- (6) 森茂暁氏「闇の歴史、後南朝—後醍醐流の抵抗と終焉—」(一九九七年、角川書店)。
- (7) 渡邊大門氏「奪われた三種の神器—皇位継承の中世史—」(二〇〇九年、講談社)。
- (8) 西源院本『太平記』(二〇一五年、岩波書店)。
- (9) 「太平記享受史年表」「太平記の世界」(二〇〇〇年、汲古書院)。
- (10) 『室町時代物語大成第八巻』(一九八〇年、角川書店)。
- (11) 久留島元氏「『是害房絵』の基本的構成」(『文化学年報第六十、二〇一一年、同志社大学文化学会)。
- (12) 『金剛山縁起』翻刻、「金沢文庫の中世神道資料」(一九九六、神奈川県立金沢文庫)。
- (13) 川崎剛志氏「『金剛山縁起』の基礎的研究」(『金沢文庫研究』三一七、二〇〇六年)。
- (14) 西口順子氏「磯長太子廟とその周辺」(『平安時代の寺院と民衆』二〇〇四年、法蔵館)。
- (15) 牧野和夫氏「延慶本『平家物語』の天狗とその背景」(『中世の軍記物語と歴史叙述』二〇一一年、竹林舎)。
- (16) 阿部泰郎氏「中世日本の宗教テキスト体系」(二〇一三年、名古屋

屋大卒出版会)によると、慶政の写本『天王寺事』には、四天王寺「御手印縁起」の注釈覚書が示されており、そのなかの「聖徳太子御墓」条に、三種の太子廟御記文が収録されていることを指摘している。

(17) 林幹彌氏『太子信仰―その発生と発展』(一九七二年、評論社)。

(18) 阿部泰郎氏『岩波講座 東洋思想第十六巻 日本思想二』(一九八九年、岩波書店)。

(19) 武田佐知子氏『信仰の王権 聖徳太子』(一九九三年、中央公論社)。

(20) 注(16) 前掲書。

(21) 赤松俊秀氏『鎌倉佛教の研究』(一九五七年、平楽寺書店)。

(22) 黒田俊雄氏『日本中世の社会と宗教』(一九九〇年、岩波書店)。

(23) 森茂暎氏『皇子たちの南北朝 後醍醐天皇の分身』(一九八八年、中央公論社)。

(24) 注(19) 前掲書。

(25) 坂口太郎氏「後醍醐天皇の寺社重宝蒐集について」(鎌倉時代の権力と制度)二〇〇八年、思文閣出版。

(26) 注(17) 前掲書。

(27) 村山修一氏(愛宕山と天狗)「天狗と山姥」二〇〇〇年、河出書房。は、『太平記』のこの場面を、「出羽国羽黒の山伏雲景が愛宕山に連れてこられ怨霊の天狗共と対面した話」とし、「天狗となった怨霊の出現」とされている。また、小峯和明氏(「説話に時代を読む」『中世説話の世界を読む』一九九八年、岩波書店)は、「政治権力闘争に破れた者が怨霊となるわけですが、その怨霊が具体的な形をとると『天狗』になる。そういうイメージが、中世の天狗の基本にある」としている。

(28) この『太平記』引用部分の続きには、「相順ひ奉る人々は、「修羅の眷属となりて」とある。青木千代子氏は「中世文学における「魔」と「魔界」―往生失敗者と往生拒否者―」(国語園文七四〇号、一九九六年)のなかで、『太平記』では、魔と天狗と

修羅が混然一体となっている」としている。また、摩醯首羅と修羅が同一視されていることに対して、摩と魔、首羅と修羅の混同によるものだろうと推測されている。さらに、『溪嵐拾葉集』には、「魔者二種あり。一は第四禅順色界頂の魔王也。是を大自在天と云也。又魔醯首羅とも云。…二は第六天の魔王欲界頂。」とあり、魔醯首羅と第六天を、魔の種類としている。

(29) 森正人氏「天狗と仏法」『天狗と山姥』(二〇〇〇年、河出書房)。

(30) 高橋昌明氏「鬼と天狗」『岩波講座 日本通史第八巻』(一九九四年、岩波書店)。原田正俊氏「天狗草紙を読む―天狗跳梁算の時代」『大仏と鬼』(一九九四年、朝日新聞社)。

(31) 桜井英治氏「室町人の精神」(二〇〇一年、講談社)。

(32) 森茂暎氏「中世日本の政治と文化」(二〇〇六年、思文閣出版)。

(33) 小林健二氏「天狗説話の視覚的展開―『是害房絵』と能『善界』―」(『王朝文学と物語絵』二〇一〇年、竹林舎)。同『描かれた能楽 芸能と絵画が織りなす文化史』(二〇一九、吉川弘文館)。また、大鳥壽子氏は、「定盛作の能『善界』」注(4) 前掲書のなかで、医師としての敗北感を持つ定盛自身を、是害に重ねて造形したとされている。